
さいごの声

たれみみ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さいこの声

【Nコード】

N8962Y

【作者名】

たれみみ

【あらすじ】

僕だけが聞くことができる声。いや、僕だけに聞こえてしまう声。それは……………。

他サイトでも掲載しています。

会社を辞めた。

大学を卒業してから、十年間お世話になった会社だ。

特に大きな貢献はできなかったけれど、特別に足を引っ張ったわけでもない。

尊敬できる上司とも、気が置けない同期とも、可愛い後輩とも出会えた。

だからこの十年間を後悔してはいない。

だったら、なぜ辞めるのか？

あえて言うならば、僕が少しだけ変わったから、そういうことだと思う。

もう三十二歳。いまさら人生に劇的な変化を求めようとは思わない。

だけど、まだ三十二歳。自分が生きている意味や生きる目的を、もう一度考え、少しでも人生の軌道修正をするには、まだ遅すぎる年齢ではないだろう。

僕にそう思わせてくれたのは、僕だけが聞くことができる声。いや、——僕だけに聞こえてしまう声だ。

それを最初に耳にしたのは、小学二年生、七歳のときだった。

父方の祖父が脳出血で急逝したという報を受け、僕達家族は、川崎から父の実家がある岡山に駆けつけた。

三歳の時以来、つまり僕にとっては初めてに等しい父の実家は、茅葺の大きな平屋だった。築百年ほどという重厚な旧家は、昼間といえども屋内が薄暗く、七歳の僕にとっては、趣を感じる余裕など

もちろんない、ただ広く冷たく薄気味悪い場所だった。

祖父は、屋敷の最も奥、二十畳ほどの広い和室の真ん中に敷かれた布団の上で寝ていた。

顔は白い布のようなもので覆われている。

つまりそれが、単に眠っているのではないことを表しているんだろう……と、僕はどこか冷めた気持ちで祖父を見ていた。

祖父との対面は四年ぶり、時々電話で話してはいたけれど、当時の僕にとって祖父は、>大切な人ランキング<で、母、父、友達のよつくん、良一、杉チン、晴彦、美土里ちゃん、そして担任の青木先生の次くらいにやっとならば祖母と共に登場するくらいの存在だった。

「裕ちゃん、おじいちゃんに会うの久しぶりじゃろう。おじいちゃんの顔、ねきい寄って見てやってな」

両親と軽い挨拶を交わし長旅の労をねぎらうと、祖母は僕の手を握り、祖父の枕元に誘導した。そして僕たち二人は、祖父の顔が見える位置に並んで跪いた。両親は沈痛な表情を浮かべながら、後ろに控えている。

僕は何だか怖くなって、助けを求めるように母を振り返った。母は無言で首を振り——しっかりしなさい——と目だけで僕を励ました。

祖母がゆっくりと白い布をめくる。

こわごわ覗き込んだ祖父の顔には、どことなく見覚えがあったが、それよりもその白く蠟のように滑らかな肌の質感は、学校の美術室の隅っこに置かれてある外人の石膏像にそっくりだった。

その発見を母に告げようと、再び振り返ろうとした時だ。

「たしか、博多明太子があったのー」

その声には確かに聞き覚えがあった。

紛れもない祖父の声だ。季節の変わり目毎に受話器の中から聞こえてくる、低く擦れた声。

僕は驚いて思わず祖父の顔を覗きこんだ。

「たしか、博多明太子があったのー」

口は閉じられたまま。でも、声は確かに祖父のものだった。

僕の横にいる祖母は何も聞こえなかったかのように神妙な面持ちで、ただ祖父の死に顔を見つめている。

——これはなに？

「昨日の夜、一人で起きてきたらしく、台所の前の廊下で倒れとったのよ」

祖母が、祖父を見つめたまま、僕に静かに話しかける。

「何しようと、しょうたんじゃろうねえ、おじいちゃん」

「水でも飲もうとしょうたんじゃないか」

父さんは祖父母と話すときは岡山弁になる。

「枕元にいつつも、ミネラルウォーターを用意してある」

「だったら、目が冴えて寝れんよおなつたから、酒でも飲もうとしようたんかのー」

「じいちゃん、血圧に悪いけえって、最近酒を控えとつた。大酒飲みのお前とは違う」

『たしか、博多明太子があつたのー』

祖母の言葉に重なるように、三度目の声が聞こえた。

僕は目をぎゅっと瞑って、膝の上で掌をきつく握った。

「……はかためんたいこ」

無意識の内に口が開いていた。

「おじいちゃん……はかためんたいこが食べたかつたんだと……思う」

祖母の目が大きく見開かれ、僕を正面から見据える。

「あんた、どしてそれを……」

説明なんて、できるわけがない。

「一昨日、福岡の清さんから贈られてきたんよ」

祖母の興奮した声は、父に向けられたものだった。

「博多明太子がか？」

「ああ、茂蔵さんの好物じゃろう、ゆって」

祖母が僕に顔を寄せて柔らかく質した。

「裕ちゃん、博多明太子が欲しいって、おじいちゃんがゆうとるんかのう」

僕は無言で大きく頷いた。

祖母の顔中の皺が深くなって、細い両腕が僕の背中を抱いた。

「おじいちゃんは明太子が食うとって、夜中に起きたんか。そうかそうか。……血圧に悪いのも知つとるうせに。そんぎゃあに食うたかったんか。どうしようもないおじいちゃんじゃのう」

祖母は、僕を抱いたまま、何度も頷きを繰り返していた。

「裕ちゃん、教えてくれてありがとうねえ」

祖母は半分笑って、そして残りの半分は泣いていた。

でも僕は祖母に「ありがとう」と言われたことで、張り詰めていた緊張の糸をやっと緩めることができた。

祖母の温かな腕に身体を預けていると、またあの声が小さく聞こえてきた。

『たしか、博多明太子があつたのー』

その声は何故か子守唄のように優しく、とても懐かしく感じられた。懐かしくて、いまはとても哀しくて……鼻の奥がむずむずしてくるような。

僕の頭の上に大きく硬い掌が乗せられた。

仰ぎ見ると、大きな父が僕を見下ろしていた。両目を真っ赤に腫らしながら。

「裕介、お前、じいちゃんの最後の声を聞いてくれたのか。そうか、ようやくたぞ。上出来じゃ」とわざと乱暴に言って、僕の頭を大きく左右に揺する。

父は照れを隠すときに、いつもこんなことをした。

——さいこの声。

あの日の僕は、その意味を深く考えることもなく、旅の疲れもあったのか、いつしか鼻を嚙りながら、祖母の腕の中で眠りこけていた。

祖父の棺には、木箱に入った高級博多明太子が一つ入れられた。

二度目の声は父のものだった。

その時僕は大学三年生になっていた。

『裕介、お父さんが死んじやったって』

携帯電話の中から聞こえてきた母の声は妙に平坦で、機械アナウンスのようだった。

「あつ、何言ってるの？」

『今お父さんの会社から電話があつて、船室のベッドの横で今日の朝、倒れているのが見つかつて……』

その後は聞き取ることができなかった。後から母に聞いたところでは、かろうじて支えていた腰が僕の声を聞いた途端に砕け、リビングカーペットの上にへたり込んで、呆然自失の状態だったという。父は遠洋航路の貨物船に乗っており、機関長として船の機関部を担っていた。

父の遺体に乗せた船は、一旦グアムに停泊し、現地の警察によって事件性の有無を調査された後に、遺体に防腐処理を施し、宮崎に帰ってくるという。

帰港予定日の前日、僕は母と共に飛行機で宮崎に向った。

船の中に特別に作ってくれた三畳ほどの狭い安置所には、父の同僚が案内してくれた。

そして僕達は父と再会した。

飯の棺に入った父の顔には、防腐処理をしたためか、かさかさに乾いた薄い緑色の肌が張り付いていた。

父の死に顔を確認し、母はその場で泣き崩れた。その時だった。

『そうじゃ、もう一度見回りをしておかんといけん』

父の声だ。その時既に祖父の“さいごの声”に接してから、十五年近くが経過していた。

その間僕は一度も、人の死に目に会っていない。そして、いつしか祖父の声も、おぼろげな遠い記憶の一こまに変わっていた。

『そうじゃ、もう一度見回りをしておかんといけん』

僕の意識を呼び戻すかのように、父の声が再び聞こえてきた。

「見回り？」と、小さく呟いた後、僕は愕然として固まった。父の言葉の意味することが、なんとなくわかったからだ。

「……あの、父は船の見回りなどをやっていたのでしょうか」

僕達を安置所に案内してくれた、僕とさほど年齢が変わらないように見える青年は、少し驚いた顔をして僕を見つめ、唾を一回飲み込んだ後に姿勢を正した。

「あ、はい。機関長は、夕食後と、ご就寝前に毎日必ず船を一周して、船内だけでなく、海に異常がないかどうかを、確認されていた」

「それはその……父の仕事だったのですか」

「いいえ、巡回の担当者は別におりますが、機関長は自分の目で確認したい、と巡回の者にお謝りになりながらも、いつも一人で船を回っていたんじゃないでした」

「裕介、それどういうこと」と母が目を腫らしたまま、訝しげに眉を寄せる。

僕は無言で母を制し、真新しい三等機関士の徽章を胸につけた青年に再び向き合った。

「それは、いつからのことでしょうか？」

「はいそれは、機関長が弊社に移られてからずっと、そう聞き及んでおります」

父が五十三歳にしてこの小さな海運会社に転職したのは、三年前のことだ。それまでは日本を代表する水産会社の巨大な漁獲船に乗っていた。

海の男達の気晴らしは酒、と相場は決まっている。そして父は、人並みを大分超えて酒が好きだった。

ある日の海の上、機関長の父を筆頭に機関士たちが、魚との壮絶

な戦いを大過なく終えた一日を振り返り、盛大な酒盛りを繰り広げていた。だが、本当の大過は既にその足元に迫っていた。酒盛りの最中に、エンジンオイルが大量に海に放出されていた。そしてそれは父の部下である、機関士の操作ミスによるものだった。

この事故により会社は甚大な損害を被り、父は責任をとって会社を辞めた。…… と言えば聞こえは良いが、事實は――事務系のお偉方とやりあい、引くに引けなくなつて仕方なく辞職した――そういうことらしい。そしてその時も父は酒を飲んでいた。

会社を辞めた父の再就職先は、すぐに見つかった。しかし、給料は半分近くにまで減額した。

それまでも、父の酒による失敗を見続けてきた母はあきれ返り、「今度こんなことがあつたら、裕介の学費用にとつておいた貯金を切り崩さなきゃならなくなりますよ」と、本気で父を叱責したが、父は少しだけ首をすくめ、それでも、コップ酒を手放そうとはしなかった。

再就職後も長い航海から帰り、休暇で家にいる時は、懲りずに昼間から酒を飲んでいた。

「酒は……父は酒を飲んでいましたか」

「いいえ、機関長は船の上では、お酒は一滴もお飲みになりませんでした」

青年はきつぱりと答えた。

驚愕の表情を浮かべたまま、母の顔が固まった。

「裕介、お父さん……」

『そうじゃ、もう一度見回りをしておかんといけん』

父はその日、風邪気味で微熱があつたらしい。しかしそれでもベッドから這い出てきた父は、エンジンオイルの幻影を見ていたのかも知れない。

リノリウムの床に足を一步踏み出したところで、祖父と同じように頭の血管を切らし、そのまま倒れ、あっさりと逝ってしまった。いろいろあつたけれど、父の死に際は男として立派だった――な

んで、軽々に口にしてしまったら、きつとあの世で再会した時に、父に思い切り頭を左右に揺すられるだろう。

「便所に行こうとしてたんだよ」、と照れながら父は笑うのだろう。僕は緑色の父の顔に向かい、ゆっくりと頭を下げた。

父の遺体は空路、川崎に帰って来た。

それ以来母は父の仏壇に、水と一緒に毎日欠かさず、酒を供えている。

大学時代に親友だった木下が死んだ。

それを報せてくれたのは、恵子——木下の結婚相手、つまり奥さんだ。

そして恵子も学生時代、木下や僕と同じ映画鑑賞サークルに所属していた。

「ワンボックスカーとぶつかって……」

訃報を聞いて集まった大学時代のサークル仲間の前で、恵子は声を詰まらせた。

ほとんど二年ぶりに見る恵子は、以前より顔も身体も丸みを帯びているように見えた。

彼女はまだ半ば放心しているようだったが、途切れ途切れに僕達に、木下の最期を語ってくれた。

木下は会社から帰宅する途中だったらしい。交差点で、木下が運転する軽自動車が右折しようとしたところ、信号無視で突っ込んできた3ナンバーの大きなワンボックスカーと衝突した。軽自動車は弾き飛ばされて横転し、横滑りしながら電柱に激突した。

それほどの重大事故だったのにも関わらず、木下の死に顔は眠っているように、きれいなままだった。

ハンドルで前胸部を打撲したことで、肋骨と胸骨が骨折し心破裂

に繋がった、それが木下の死因と判断された。

「恵子、無理しないで休んでおいたほうがいいよ。明日は朝からいろいろと大変なんだし。……身体にも負担がかかるだろうから」

昔のサークル仲間の一人、貴枝が恵子に寄り添い肩に手をかける。しかし視線は何故か恵子の腹に……。

——そういうことか。

僕は自分の鈍感さに自分で呆れ返り、もう一度恵子の腹の膨らみを盗み見た。

その時だ。

『けいすけか、けんすけにしよう』

木下の“さいごの声”は、どこことなく弾んで聞こえた。

『けいすけか、けんすけにしよう』

事故死する直前に、木下は、もうすぐ産まれ来る我が子の名前を考えていたのだろうか。

——でも、何故？

僕は混乱した頭の中で、その二つの名前を反芻した。

おそらく漢字に当てはめれば“恵すけ”そして“健すけ”になるのだろう。木下の名前は健一だ。

そして、“すけ”の字はおそらく……。

木下と恵子は大学を出てから四年後、二人共二十六歳の時に結婚した。

大学在学中から二人と僕は、サークルの中でも、特に仲が良かった。卒業して、それぞれの進路を歩み出してからも、その関係は途絶えることなく、常に三人で連れ立って遊び、映画を鑑賞し、そして語り合っていた。

しかし、よくある三角関係はその後、予想よりも早く、よくある結末に辿り着く。

つまりは、僕以外の二人が結婚を選択し、僕だけが取り残された。二人の結婚を僕に報告したのは恵子だ。

「三人一緒にいつづけることが、苦痛になってきたの」

恵子は涙を浮かべながらそう語った。

では何故、僕ではなく木下を選んだのか？——僕は最後まで、それを訊くことができなかった。

プロポーズをしたのが、たまたま木下の方が早かったからなのか？ それとも、恵子は選ぶ相手を初めから決めていたのか？

どちらの答を聞いても、僕がそして恵子もひどく傷つく予感を感じていた。

僕はその夜、木下に電話をした。

「お前とは絶交する」

暫くの間、木下は「そうか、わかった」と短く応えた。「何故？」とも返さず、「ごめん」とも言わなかった木下はきつと、僕の気持ちを十分に察していたのだろう。

『けいすけか、けんすけにしよう』

三度目の声に思わず顔を上げた僕の視線が、恵子のそれと交差した。恵子が心配そうな表情を浮かべて僕を見つめていた。

「あの、ちよつといいかな」

恵子の反応を確認することなく、僕は立ち上がり、木下の棺が安置されている和室を出た。

廊下に佇みながら恵子を待つ。

「どうしたの？」

恵子が心持ち足を引き摺りながら、廊下に出てきた。

「お腹の赤ちゃんの名前……木下が考えていたんだろ」

「うん……男の子なの。それがわかってから、あの人、自分が名前を考えるって、張り切っちゃって。でも……」

「君は、あいつが考えた名前を、まだ聞いていない」

「……そう。でもどうして？」

「恵すけか健すけ」

「……」

「そう、あいつは……考えていた——嘘じゃない。

「裕介、健一と話したの？」

「あいつの想いを聞いた」——嘘じゃない。

「わかった……ありがとう」

「じゃあ」

再び和室に戻ろうとした僕を恵子が呼び止めた。

「裕介」

和室に繋がる扉にかけた僕の手が止まった。

「健介にする、この子の名前」

僕は思わず振り向き恵子を見つめた。

「あの人の健と、あなたの介。怒らないでね、それがあの人の望みだったんだから」

くしゃくしゃの顔でたくさんの涙を流しながら、それでも恵子は笑っていた。

「あの人が私にくれた最後の贈り物、この子の名前……届けてくれてありがとう」

恵子はお腹に手を当て、優しく一言「健介」と呼びかけた。

その横顔には、途方もない悲しみを受け止め、乗り越え、その上で母になろうとする、強い決意が滲んでいた。

救急車のサイレンが鳴り響いていた。交差点の一角に、人溜りができている。

夜の八時過ぎ。コンビニの袋片手に家路を辿っていた僕の足は、何となくそちらに吸い寄せられていった。

（車と自転車が接触したんだって）

（直進しようとしていた自転車の側面に車が突っ込んだんだよ、俺完璧に見たんだから）

（うそ、マジで？）

（マジもマジ、超ド級のマジよ。でもさ、その自転車も、なんかす

げー急いでた感じだった)

(なんで?)

(そんなこと俺が知るかよ。ほらあれ、自転車に乗っていた女の人)
二十歳過ぎくらいの若いスーツ姿の女性が担架に乗せられ、救急車の中に運び込まれようとしていた。

その顔には酸素マスクのようなものが被せられ、耳からは……赤黒い血が流れている。

(げ、やばいんじゃない、あの人)

(息してねーよ、てか耳血は脳みそいつちゃてるって)

救急隊員が喧騒に背を向けるように、厳しい表情でトランシーバーを耳にあてている。

その時だ。

『早くしないと、みあかーさが』

若い女性の声だった。

一瞬、群衆の中の誰かが発したのかと思った。

僕は辺りを見回して、声の主を探した。

『早くしないと、みあかーさが』

二回目を聞いたときには、全てを理解していた。

担架の上の女性が既に事切れていることを。そして、僕に届く“さいこの声”には、肉親や友人だけではなく、赤の他人のものまでも含まれることを。

救急車は女性を乗せ、けたたましいサイレンの音を残して走り去っていった。

フレームがひん曲がってしまった自転車は撤去され、自動車の運転手はパトカーの中で事情聴取を受けている。

すると群集の方も急に興味を失くしたのだろう、潮が引くようにあっさりとその場から消えていった。

そして僕だけが取り残された。

『早くしないと、みあかーさが』

———という意味だ? みあかーさ……外人の名前だろうか? 彼

女の友人の渾名か？ それともお母さんのこと？

もちろん、このまま疑問に蓋をし、忘れたふりをして、一人暮らしのマンションに帰ることもできる。

そうしたとしても、誰も僕を咎めはしないだろう。

——だけど……咎められなければそれでいいのか？ でも僕に何ができる？

僕は大きな溜息を一つ吐き出し、買ったばかりのスマートフォンを鞆から出した。

> みあかーさくを検索すると、> 在宅介護支援センター<が最初に検出された。

——彼女は、こんな時間に介護センターに向っていたのか？ さらに検索を進める。

しかし、周辺に『在宅介護支援センターみあ・かーさ』はなかった。

再び指で画面をスクロールする。

気になるサイトを開き、“さいごの声”との繋がりを探す。

その作業を何度も繰り返した。そして、一時間が経とうとした時、僕の指が止まった。

『ギフト専門店 M I A C A S A』

その店の住所は、ここから歩いて十分程度。

自転車なら、もっと早くに到着できる。

そして、閉店時間は……午後八時となっていた。

彼女が事故に遭ったのは八時前。

——彼女は、閉店時間が迫るギフトショップに急いで向っていた。

おそらく誰かへのプレゼントを買う、または受け取るために。

そしてそのプレゼントは、どうしても、その相手に、明日渡さなければならなかった。

僕は、自分の思考を追いながら、それが単なる推察ではなく、限りなく真実に近いものであることを、何故か確信していた。

玄関扉を開けて出てきたのは、五十年配の温厚そうな男性だった。疲れ切った力のない視線を彷徨わせ、数秒後にやっと門扉の外に立つ僕を確認した。黒いセーターとベージュのチノパンという服装は、たぶん昨晚からずっと着たままなのだろう。白髪混じりの髪の毛は艶なく乾いていた。

「……なにか」

空ろな瞳で僕を見ながら、男性は痰が絡んだような小さな声を発した。

「お嬢さんのことで、お話したいことがあります」

散々迷った挙句に僕は、この何の色もない言葉を最初に選んだ。

男性が息を呑む音が聞こえてきそうだった。しかし男性は、僕の語調から何かを察したのかもしれない。無言で僕に先を促した。

「昨日の夜、お嬢さんが急いでどこに行こうとしていたのか、そして何故急いでいたのか、その理由を僕は知っています」

前の晩、『ギフト専門店 M I A C A S A』を検索した後、僕は警察署に向かった、事故の目撃情報を伝えるという口実で。

運転手が既に自供を始めており、目撃者も多数いる。事故の瞬間を見ていない僕の話は、当然のことながら警察にとっては何の有益性もなかった。

しかし、僕は中年の巡査部長との会話の中で、彼女の名前と年齢を知ることが出来た。村越佑香さん二十三歳。いつの日か線香をあげに行きたい、と拝むように頼むと、人のよさそうな警察官は困ったような表情を浮かべて、両親と同居している彼女の住所だけを口頭で伝えてくれた。

翌朝、開店と同時に『ギフト専門店 M I A C A S A』の扉を叩いた。村越佑香さんの名前を出すと、三十歳ほどの柔らかな笑顔が眩しい小柄な女性が、すぐに反応してくれた。

「昨日、村越様からお電話がありまして、残業で遅くなるけれど、必ず閉店時間までには受け取りに行きますって」そして、女性は心

配そつに童顔を少し歪めた。

「閉店時間を過ぎてもお見えにならないので、八時半まではお待ちしていたんです……携帯電話にも何度かお電話したのですが、電源が入っていないか、圏外だったようで」

携帯電話はおそらく事故の衝撃で壊れたのだろう。

「御代は既に頂いているので、当店としては特に困ることはないのですが……せつかくのギフトですので……村越様、このギフトのことは御家族には内緒にしておきたいと、だからご連絡先も御自身の携帯電話番号しか記入されずに……あの村越様に何か」

不安に耐え兼ねるように、女性が言葉を止めた。

僕は、昨晚の彼女の事故のことを簡潔に伝えた。

童顔の店員さんの大きな瞳が、見る間に涙で一杯になった。

「お嬢さんは昨晚、ギフトショップに、これを受け取りに行こうとしていたのです」

僕は、門扉の上に、童顔の店員さんから預かったベージュの紙袋をかざした。

村越佑香さんの父親は、僕の顔と、ギフトショップのロゴが入った紙袋の間で視線を泳がせ、やがて肩から大きな息を吐いた。

玄関扉を閉めて、石畳の上をゆっくりと近づいてくる。

門扉を開けながら、「どういうことですか？」と僕の目を見ずに低い声を発した。

「中を見てください」と僕は紙袋を彼に手渡した。中にはきれいに包装された四角い箱が入っている。

村越さんが袋の中から四角い箱を取り出した。だが、戸惑うようにただ見つめているだけだ。

「佑香さんが、あなたと奥様の銀婚のお祝いに贈ろうとしていたプレゼントです」

村越さんが弾かれたように背筋を伸ばした。半開きになった口元が、微かに震えている。

「今日行われる予定だった銀婚式でプレゼントしようと、用意していたそうです。あなた達に見つからないよう、昨日まで、それを買ったギフトショップに預けていたそうです。そしてそれを昨晚……」
僕の声を遮るように、村越さんが大きな音を立てて、包装紙を引き裂き、破る。

震える指先で箱の蓋を開けた。

「これは……」

「マグカップです。あなたと、奥様のための」

ペアのマグカップは秋の陽光を浴びて、柔らかく優しい乳白色に輝いていた。

「佑香さん、それを選ぶのに、二時間かけたそうです。いろいろと迷いながら、店員さんにも相談しながら」

「……………」

「翡翠の粉末が塗りこまれているそうです」

「翡翠」

「あなたも奥様も最近血圧が高めだと……翡翠には高血圧を改善する効果も……」

——しゃべり過ぎだ。わかっている。でも僕は、佑香さんがこのマグカップに込めた両親への思いの全てを、どうしても伝えておきたかった。

「ありがとう」

「……………」

「ありがとうございました」

村越さんは、マグカップの入った箱を両腕の中に抱え、僕に向かって深く、長く、頭を垂れた。しかし、その顔からは一切の表情が消えていた。

踵を返すと、再びゆっくりと玄関扉に向かい、やがて静かに家の中に消えていった。

僕は呆然と村越さんを見送りながら、今更ながら自分のしたこと

の意味を思っていた。

佑香さんの両親に対して、もしかしたら僕は、とんでもなく残酷な仕打ちをしてしまったのかもしれない。

自分たちへのプレゼントを受け取りに行ったがために、娘は事故に遭いそして死んでしまった。彼らが知らずにすんだかもしれないそんな情報を、一方的に告げる資格も権利も僕にはなかったはずだ。――僕はいったい何をしたかったのだろう……。

事故死した娘の想いを家族に届ける――それは本当に彼らのためだったのか？ 他人に感謝される、本当はそれ以上のことを求めているのではないか？

“自分でも他人の役に立つことができる”そう確信したいがために、彼らの想いを利用しただけじゃないのか……。

僕は力なくうなだれたまま村越宅を後にした。

秋晴れの土曜日。駅前ではカップルや家族連れが賑やかにランチの相談をしている。

急に空腹を覚えた。そういえば昨晚も今朝も食事らしい食事をとっていない。

こんな時でも空腹を我慢できない自分を晒いながら、僕の目は適当な店を探していた。

比較的空いているラーメン屋を見つけ、足を踏み出したその時、強い力で右肩が掴まれた。

驚いて振り返ると、村越さんが両膝に手をつき荒い呼吸をしながら、僕を見上げていた。

「あ、あの後、すぐに、あ、あなたの後を追ったのですが、なかなか見つからなくて」

「……僕のことを探していらしたのですか？」

村越さんは返事をする代わりに、大きく唾を飲み込み、小さな頷きを繰り返した。

「……どうして？」

「ひ、昼ごはん、一緒に食べませんか」

「昼ごはん？」

「ええ、まだでしょう。私におごらせて下さい」

「あ……いえ、とんでもない」

「もう少し、もう少しだけ話を聞かせてくれませんか。あの子の…

…あの子の話を」

お父さんは赤い目で、縋るように僕を見つめていた。

「あなたからなら……聞くことができる、そんな気がするんです」

そして、僕の右手を両手で強く握った。

「あの子の最期のことを」

「君がこの会社に入りたいと思ったのはなぜ？」

達磨のような体形をした恵比須顔の社長は、一言目からいきなり切り込んできた。

子供のような無邪気な瞳を輝かせ、僕の答えを待っている。

面接に臨む前に、想定問答の練習はしてきた。

でも、この社長の前では、上辺だけを取り繕った綺麗ごととは全て見透かされてしまう、僕は瞬時にそう思った。

だから僕は、何の飾りも誇張もない、自分の心の真ん中にある思いを言葉にした。

「死者のさいごの声を、親族に届けたい、そう思ったからです」

社長は怪訝な表情を浮かべ、視線を空中に漂わせた。

何も食べていないのに口元をもぐもぐと動かし、小鼻をぴくぴく震わせている。

「それ、なんだか」と、もぐもぐしながら、次に続く言葉を選んでいる。

そして、小鼻を広げ、目尻を思い切り下げた。

「おもしろそうだねえ」

社長はおもむろに立ち上がり、短軀を伸ばして、机の向こうから僕に、太くて短い右手を差し出した。

「寿葬儀社じゆうざんぎにようこそ」

呆氣にとられていた僕は、慌てて立ち上がり、社長の右手を両手で包んだ。

「葬儀つてのはねえ、単に故人を見送る儀式じゃないんだよ。亡くなった人の新しい門出を親族、友人、知人全員が集まって祝福する場でもあるんだよね。だからうちの社名には寿が入ってるんだよ。まあ、紛らわしい、とか死者を冒瀆している、なんて非難は後を絶たないけどね。でも私は絶対に変えようとは思わない」

社長は恵比須顔で僕を見上げていたが、眼光は眩しいほどに輝いていた。

「せっかく門出を祝福するのに、生きていた時に大事なことを伝えられなかった、聞けなかった、なんて心残りがあっちゃだめだね。うん。いいよ、凄くいい。故人の最後の声、じゃんじゃん伝えちゃってよ、届けちゃってよ」そう言って、社長は豪快に笑った。

おそらく社長は僕の言葉の意味を正確には理解していないのだろう。

でも、それでもいい。この社長の下でなら、僕にしかできない何か、人のためになる何か、それができるような気がした。

僕は達磨のような社長に向かい、直角に頭を下げた。

「よろしく願います」

それは、自分自身に贈る門出の言葉でもあった。

< 了 >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8962y/>

さいごの声

2011年11月26日22時50分発行